

【乳幼児観察のガイドライン】 一 児童心理臨床に備えて一 (1988)

Margaret Rustin

乳幼児の発達を精神分析的観点から組織的に観察するといったテーマについて語ろうとしますと、実践上それは語り尽せないほど実に盛りだくさんな事柄に満ちておりますため、おそらくそれらの幾つかに限って焦点づけることはやむを得ないでしょう。まずそれらの一つとして掲げてみたい事柄とは、それは殊に私の興味の惹かれるところなのですが、観察者は乳幼児及びその家族の中に生じるところの原初的な情動性 primitive emotional states なるものに遭遇するわけではありますが、実にそうした何が起こってもおかしくはないといったスツタモンダの事態に立ち会う観察者自身の反応にもまた同じく原初的な情動性が往々にして頭を擡げざるを得ないということなのです。《乳幼児観察》とは誰にとってもそうした機会になり得るということになります。そうでありますからこそ、こうした経験を素地にして将来のセラピストは心理臨床へと向けて心の体勢を準備してゆくものと考えられております。ここではそういった観点から《乳幼児観察》について述べてまいりたいと思います。

この際、論述の枠組みとして、《乳幼児観察 infant observation》がチャイルド・サイコセラピストのトレーニング・コースにおいてどのような位置づけをされてきたのか、それをまずお話ししてみましよう。このような極めて特殊な方法で赤ちゃんについて学ぶのは、児童分析家 Ester Bickのパイオニア的な働きかけに拠るものであります。戦後の或る時期、チャイルド・サイコセラピストのための専門的なトレーニングがまさに始まろうとしておりました。受講生は、規則的に週一回、或る決まった時間に家庭訪問をし、一時間ほどの観察の後、その事柄を出来るだけ克明に記録することが求められました。推論とか、憶測、それに個人的な反応は、概してそうした記録資料の中には含まれません。受講生たちは、大体5人ほどのメンバーの小グループのセミナーに週ごとに集い、セミナー・リーダーと共に1時間半ほど掛けてそれら観察資料について学びます。セミナー・リーダーは、そのアプローチにおいてさまざまでありますものの、概ね受講生は代わる代わる‘自分の赤ちゃん’について発表をする決まりとなっておりますから、各自は一学期にほぼ2回くらい観察経験を発表する機会が与えられるということになります。こうした観察は、それに並行してセミナーもまた、2年間継続されることとなります。

セミナーにおいては、提出された資料内容に即し、子どもと母親、それに観察中に一緒だった家族の他の誰かとの間に見られた情緒的な交流 the emotional events を巡ってあれこれ掘り下げてゆくことに論議は終始いたします。その意図といいますのは、子どもと他の誰か、観察者をも含めて、それら相互間に起こる関係性の進展を辿りながら描写し、またそうした行為および関わり合いのパターンの無意識的側面を理解することにあります。観察を重ねてゆくなかで徐々に何らかのイメージが浮上してまいります。そこで家族相互の交流には何らかの特徴的なダイナミクスがあることを知るに至るわけです。それぞれ各自のパーソナリティやら関係性を基礎づけているところの家族それぞれの‘内的世界’が明らかになるのです。殊に、赤子の‘パーソナリティ’が今まさに創られんとしているさまに立ち

会っているわけでして、その子の生来的かつ気質的要因と、その子を抱えるところの環境が有するところの長所もしくは短所との兼ね合いが検討されるでしょう。大概の観察者は、その観察対象となる子どもを、言うなればその内側からリアルに理解するといった感覚を把握できるようになります。子どもの‘内なる世界 internal world’に深く感情移入するばかりではなく、その形態および構造を理解し、そして内在化された対象関係のパターンを認知することもできるようになるわけです。このようにして《乳幼児観察》は子どもの早期の発達について学ぶべく実に得難い‘イントロダクション’になると考えられます。

こうした試みにトレーニングの多くの時間を費やすことの理論的根拠を挙げるとしますと、その一つは早期の情緒的発達—すなわち実際の赤ちゃん—について学ぶこと、そしてもう一つというのが観察中のさまざまな事象に研修生自身がどのように反応しているかについて学ぶこと、これら2つの事柄が総括されましょう。後者についてはまず、観察者が訪問中に家族の中にどのようにして自らの‘居場所’を見つけるかということが問題になりましょう。それに、観察者が家族のそれぞれ違うメンバーに対して同一化したり、そこで目の当たりにする不安感、不確実感、そして少なからぬ無力感にも反応したりしてしまうといったことや、さらには観察の情緒的なインパクトのせいで自らのうちの何らかのパーソナルな問題が露呈するといったことなど、諸々の問題が起きてまいりますでしょう。

観察は非・臨床的なセッティングで行われます。そこでは観察者は、友好的で、決して侵人的ではなく、注意深く耳を傾ける、信頼に足る存在としてそこに居ることだけなのであって、何らそれ以上の責任を負うものではありません。そしてこうした経験は、研修生にとって、いずれ臨床に携わる上での適性やら意欲が大いに培われてゆく、そうした機会になるものと考えられます。この意味で、《乳幼児観察》は児童臨床に携わる前段階としてのトレーニングのプレ・クリニカル pre-clinical・トレーニングのプログラムを構成する一つの卓越した要素であるわけです。つまりは、これが研修生並びに教官にとっても、サイコセラピストとしての職業的適性とは何かという点において判断の一つの目安になるかと思われまふ。それでもしも観察者が既にクリニカル・コースへと進んで、セラピーに携わりはじめた初心者である場合ですと、観察場面において、強烈な感情に晒され、それら感情のインパクトゆえに情緒的な無意識的領域に引きずられ、そして自らのバランス意識やら思慮分別を維持せんと大いに葛藤したり、おそらくはなじみのない混乱した幼児的情動性のありようの凄まじさに遭遇することが乳幼児観察の殊更に得難い側面として理解されてまいります。こうした学びの側面は、W. R. Bionのいうところの‘～について学ぶこと learning about’即ち「知能面における行為 intellectual activity」と、‘経験から学ぶこと learning from experience’、それは即ち聖書にある「知ること knowing」にも似た、何ごとかもしくは誰かしらの中核およびエッセンスに密接に触れ得るような‘知識 knowledge’といった、それらの違いに繋げてみるのもよろしいかと考えます。つまりのところ、ここで目指されておりますのは、情動的な深みに根ざしたところの‘知 knowledge’の一つの形態なのであります。

セミナーで論議されます一つの重要な観点としては、受講生にとって徐々にその観察場面において

‘転移 transference’ 及び ‘逆転移 counter transference’ といった事象が明らかに見えてくることであります。例えば、受講生は家族との電話での最初の打ち合わせからして、とても予期しないような対応をされることなくありません。まず観察者は自己紹介にあたり、家庭という場面で赤ちゃんの発達してゆくさまを学ぶことに興味があるということ、それも子どもの発達の専門的な研究のための観察であるということをお互いに伝えます。セラピストかメンタル・ヘルスといった類いのことは何ら言及されません。ここで観察の注意事項として肝心要となるのは、赤ちゃんがどのように関係性を培ってゆくのか、その能力や行動性といった側面にありますから、観察者が居るということで普段の家庭生活のありようを殊更変えたりせずに、赤ちゃんをいつもの状態で見させてもらうということでもあります。しかしながら、家族の期待感というもの、それは普通には母親ということになりますが、実にさまざまあります。観察者をありとあらゆる特殊な知識を備えたチャイルド・ケアのエキスパートとして見たりもするでしょうし、また人生の基本的な事実やら、特に赤ちゃんのケアの基本について教えられる必要がある誰かといったふうに扱ったりもいたしましょう。セミナーではお互いに経験が交換されますので、そうした比較のお蔭で観察者が家族の中にどのように位置づけられているのか、その意味づけが徐々に見えてまいります。つまりは、それが現実的な観察者の能力に対する認知に拠るといふより、むしろ母親の内的世界の或る見方 the inner world-view からもたらされた期待感が反映されているといったことが分かってまいります。受講生は、家族の中で観察者として居心地のいい関係性を創る上で必要な限りでの個人情報を与え、それ以上のことは控えるようにと助言されます。それから、観察者の役割というのは受容的な聞き手であるということが求められます。それはただぼんやりと受け身であることではありません。むしろ母親、赤ちゃんそして周囲の誰かがいれば、彼らに導かれるままにひたすら身を委ねるといったことであります。勿論のこと、観察者の役割は時間を経るうちにかなり違ったものへ変わってゆくことも考えられます。彼女〔彼〕はいずれ家族に馴染み、親しい誰かになるでしょうし、赤ちゃんは次第に遊戯において、そして後には言語的に、観察者に対して自ら率先して直接的な関わりを持つようになり、観察者としての役割としてどうあるべきか、よくよく検討する必要が出てまいります。

こうした新しい事態に遭遇して観察者が内心覚えがちな不安感というのは、子どもの出産後母子が共に過ごす最初の何週間かの中に味わう不安感とは区別しておくのがよろしいでしょう。しかしながら、これら2つの不安感の源は、それぞれ相交わり反響し合っておりますわけで、それで事態が耐え難いものになるか否かの別は、ことごとくその場に登場するすべての人の ‘抱える能力 containing capacities’ に拠っているといえましょう。

まずここで、観察を初めて試みる者に特徴的な関心事について幾つか考えてみることにいたしましょう。それからそこに潜在する、より原始的な primitive 心の側面について探索してみようと思います。しばしばセミナー・グループの誰しもが、観察という事態において、それが ‘侵入的’ になりはしないかといったことに大いに頭を悩ますものであります。観察者は、家庭という人々のごく親密な場に招き入れられるわけですが、それも単なる社交的な訪問ではなく、生まれたばかりの幼い子どもの育児に間近に接するわけでもあります。授乳やら入浴、そして抱っこ、その他にも諸々の母親が新生児に対して与え

るところの総てをじっと注視していることは、観察者にしてみれば、母子共に最も無防備で傷つきやすい瞬間に自分が居合わせているように思われましょう。感情はしばしば表面下にちらっと顔を覗かせるだけではありません。爆発することもあるのです。観察者は、ありのままの母子間の親密さに直面することになりましょう。しばしば母乳が与えられたり、それから勿論さまざまな赤ちゃんの身体的なケアがそこに含まれます。新生児の小ささ、ぐらぐらして安定しない頭、大きく見開かれた眼、皮膚の柔らかさなどは観察者にとってしばしばショックであります。いくら我が子で経験済みであったとしても、もしくは専門的立場でそうした子どもを見慣れているにしても…。観察者という立場では、子どもを目の前にして普通期待されるところの積極的な動きを一切取りません。そうしないということで、観察者に心の余白が生じ、子どもの感覚されていることがよりいっそう強烈にインパクトをもって受けとめられるからなのです。こうした場面に初めて接する観察者にしてみれば、赤子のまさに経験していることに深く同一化することがあったりいたしますし、同時に赤ん坊に寄り添おうと懸命な母親との同一化にも強く引き込まれることとなります。育児というものは、‘新米ママ’にとってはすっかり圧倒されかねないものです。しかし、たとえ既に育児経験のある母親にしても同じでして、子どもというものはそれぞれに備わった個性が違いますから、どの子を相手しても常に‘初めて new’の育児になろうかと思われまます。

観察者は、自分が観察していることで母子間の親密な関係性のプライバシーを侵害するのではないかととても気遣います。これら不安感は、セミナー・グループ内でこうした研究法についての批判というかたちで取り沙汰されることにもなりましよう。観察がどちらかという攻撃的な‘覗き見’的態度と結びつくことを怖れるからであります。セミナーのリーダーは、注視することでもたらされる不安感についてはよくよく検討し、こうした事態ではどのようなことが観察者に要求されているのかということに専念し、それが‘悪用’されるかもしれないといった彼らの怖れから免れられるように観察者を導かねばなりません。この場合の悪用とは、親たちの適性についてのややもすれば一人よがりな判断、それもグループの優越性を強めんとして敢えて図られたものだったり、もしくは家族が経験している困難の領域について陰険なあら捜しをして、彼らに備わっている特有の力強さや喜びやらを評価しないといったふうによりバランスを欠いていたり、もしくはその観察された実際の身体的な、殊に性的な側面について興奮を覚え、それで未熟で幼稚な感情を懐くといったことでもあります。

観察された内容は、十分に慎重なる熟考を重ねるのでない限り、行為化 acting-out を招く傾きがあるといわねばなりません。なぜならば、観察者自らの‘幼児的な部分 infantile self’が、母親と赤ちゃんというカップルの観察によって苦痛なほどに刺戟されるからであります。さまざまな葛藤が観察者の内側に惹き起こされるといえましよう。例えば、時として、競争心の強い母親、無視されている他の同胞、慈愛深い祖母、もしくはその場から排斥されている第三者といった、それぞれの感情に襲われて身動きがつかなくなることがありましよう。観察者自身が赤ん坊の頃に味わった無意識的感情 unconscious feeling の記憶やら、もしくは母親として懐く己れ自身の恐れやら願望など、それらが実際的であろうと、もしくは潜在的なものであろうと、さまざまに惹起されるのであります。男性の観察者の場合ですと、訪問の最初の頃にもしも母親が赤ちゃんにお乳を与えているとしましたら事態はかなり

微妙なものになりましょう。西欧の文化では男女間に、それがパートナーではない男性ですと、こうした身体的な親密さという事態には極めて不慣れだからであります。その点で母親も観察者も双方共、配慮しなければなりませんでしょう。実際に、それが耐えられるためには、観察の場に夫なる人の同席が必要となることもあり、もしくはそれがため母親が観察者との訪問を取り決めするにあたり、授乳時間を敢えて避けるといったことにもなりましょう。

こうした関心の及ぶ範囲がさまざまなのは、われわれの‘眼を使う’ということに潜む無意識的な意味合いから生じるものと考えられます。眼とは慈愛、興味、そして真実性を伴って機能するように感じられる場合もありましょうが、攻撃に使われたり(例えばあら捜しといったこと)、不快な感情を投影させるやら(よく語られることのある‘羨望に満ちた green with envy’の眼がそうですが)、もしくは限界を超えて踏み込むやら(例えば鍵穴から覗くといったようなこと)、もしくは何らかの歪みによって誠実であるべきはずの観察を妨げるやら(移動遊園地やら蠟人形陳列室でよく見かける歪んだ鏡みたいに)、そうした‘凶器’として使われるように感じられるからであります。

実際のところ、観察のために取り決めの手続きをしたり、初めの頃の訪問でなんとか首尾よく事を運ばせることを通して、関係性を築く最初のステップのありとあらゆる不安感が露わになります。こうした経験は、受講生がいずれ臨床症例に携わる上で随分と有益な予備知識となるに違いありません。どんなふうに自己紹介をするのか、部屋のどこに身を置か、いつ腰を掛けるか、コートは脱いだほうがいいのかどうか、差し出されたお茶はいただくのがいいのかどうか、そして家庭に他の幼い子どもが居合わせる場合ですと、赤ちゃんの訪れという事態にあって殊更に観察者に対して気を引こうとしたり、威張り散らしたり、邪魔立てしようとしたり、もしくはあれこれうるさくまとわりついたりもするでしょうが、そうした彼らをどのように受け入れるべきか、それから観察中に他の誰かが訪ねてきた際にはどう対応すべきか、どのように訪問を終わり、お暇を告げるかといったことなど、すべてがとても重要な課題になりましょう。どの程度の話をするのがいいのか、パーソナルな質問にはどのように対応するのか、それに一般的に言って、パーソナルと同時にプロフェッショナルといったどの辺りに関係性を見出しかつ維持し得るのかといったことはセミナーにおいても話題としてよく頻発する、とても重要な事柄なのであります。そうした試みのなかで、自らのパーソナルな問題に直面し四苦八苦すること、そしてそれらがなかなか解決しきれないままに敢えて自らの不完全さを受け入れるなり、もしくはどうにか欠点を変えなくてはと懸命になるといった経験はかなり苦痛な挑戦ともいえましょう。

例えば、或る観察者の場合、それも最初の訪問で、母親が急な買い物があるとかで一っ走りして行く間に赤ん坊を見てと頼まれたということがあります。ここで彼女はジレンマに陥りました。一方ではその新米の母親の意向になんとか応えてやりたいという思いもありましたわけで、彼女は赤ん坊に行き届いたケアをしているのは間違いないようですし、<ちょっとでも動かすと、この子ったら起きてしまうのよ>といった具合でしたから。でも育児を家事全般の責任を担うこととどう結びつけたらいいかうまく要領が得られていないといったふうに見受けられました。他方では、母子と一緒にという観察のセッティング

の制約を順守せねばという思いがありました。こうした場合、どうしたらこちらの意向を先方に伝えられるものでしょうか？どう応答したらお高く留まったふうでも、もしくは変とも思われずにすむでしょうか？また母親の方も手を貸してもらえないと失望したり、それで怒りを覚えるなど、どうしたらそうした気持ちを抱かせずにすむものでしょうか？（もう一つ困惑させられますことは、大概の母親は、観察者が眠っている子どもにも興味があるということを理解し難いということでもあります。母親たちは赤ん坊が眠っている最中も会話でなんとか間を繋がないと思ったり、あるいは観察者をその眠っている子どもと一緒にしばし放っておかねばと思ったりするようでもあります。それでもしちょっとでも赤ん坊が目覚めるようだったら、すぐさま気づけるようにというわけです。）もし一度でもこうした事態になれば、敢えてベビー・シッターになることを拒むことは難しくなましようし、かくて観察者はそれ以後何ヶ月も母子と一緒に観察しなくてはならないのにそのようにうまく事が運ばないといった葛藤を味わうことになりかねません。日頃育児に他の人の手助けを殆ど貰えていなかった母親の場合ですと、こんなふうに頼りになる誰かを見つけたということになりますわけで。また或る別の意味で言いますと、こうした母親には、観察者は赤ん坊を見に来てるのであって、自分ではあり得ない、つまり彼女自身はなんら興味を抱かれるに値しないといた思い込みがありがちだからといったことなのかも知れません。

こうした例から、観察者という立場が抱える難しい局面が浮き彫りにされます。どのように反応することが母親を一人の大人として適切に遇することになるのかであります。たとえ幼児的なレベルに対してはまったく違ったふうに対処するであろうことを頭の隅に置くとしても…。観察者がベビー・シッターとして機能することが期待されているといったことは結構ごく普通にあることです。そうした場合には幾分か、母親たちの多くが圧迫されており、社会的にサポートされていないといった不適切な育児状況が反映されております。また、これとは別に、母親の側に自己評価の低さ self-devaluation が潜在しており、子どもと一緒にいることに困難があったり、子どもに対して敵意を懐いているといった深刻な事態がそこに反映されている場合もありましよう。

もう一人別の或る観察者の場合ですと、これと似たような事態に直面しております。約束の時間に訪ねてゆきますと母親が外出して居ないということが何度かありました。時には玄関の扉に、＜赤ん坊は家の中にいる。自分はすぐ戻るから＞といったメモ書きが貼られてあったりするのです。それも一度などは、赤ん坊が家の中でかなきり声をあげているのを耳にしなが、玄関口で為す術もなしに母親の帰宅を待たねばならなかったのであります。こうした事態は、観察者にそれ相応の切迫した不安感をもたらします。おそらく子どもがその身を晒されている苦痛やら危険のレベルにまでも…。そこで、自分が負うところの責任というものについて慎重に考慮せねばならなくなるでしょう。上記しました例などは、育児の初めの頃に母親が責任を担う上での困難を示唆するものでありますが、さらには子どもが動き回り始めますとき、明らかに危険のある環境に子どもが放置されていて、それを母親はまるで関知していない場合ですと、さらに深刻な事態へと発展するでしょう。観察者は、そこではいかなる介入が援助的かということを見極めねばなりません。母親の無視を埋め合わせしてやればいいのか、事態をそれ以上こじらせないためにも母親にそうした彼女の問題に注意を促すべく何らかの手段を講じ

ればいいのか、赤ん坊のケアがもっと円滑になされるための必要条件として、(外部からの)よりいっそうの手助けや支援を母親が必要としているのではないかなど検討してみる必要も出てまいりましょう。

極端な例になりますが、深刻な育児放棄や虐待行為、もしくは性的な虐待といった明らかな事実の証拠があれば、セミナー・グループの面々は、一見して子どものケアに対して制定法によって定められ、責任を担う外的機関の介入が求められるような事態に観察者という立場でどう対処したらいいかを話し合うことになりましょう。それは、観察者がその場に‘安全弁’として存在してる限りにおいて起こるといった危険な行為で、つまりは或る意味母親の傷つきやすく脆い部分の絡んだコミュニケーションの一つとして理解していい場合もありますが、もしかするとそれは実際に日常的に赤ん坊の身が危険に晒されている状況なのかも知れません。観察者としての立場では多くの場合なかなかどっちとも判断しかねますでしょう。観察された出来事の流れを詳細に追ってゆくうちに、それらはいずれ明瞭になるものと思われかもしれませんが、それでも、週ごとに訪問する観察者が、或る程度の期間、不安感に耐えねばならないことになるのは明白であります。これらの極端なケースは、観察者という立場が抱えるところの不確実性を浮き彫りにいたします。つまりは、観察者とは家族にとっては訪問者にすぎないのです。そうした招かれた観察者としてではなく、ソーシャルワーカーもしくは警察官として振舞うやら、もしくは臆病やら混乱、考えなしの共謀ゆえに子ども或いは親の利益を裏切り損なうといった、いずれにしてもそのような諸々の軋轢の中で耐えねばならないとしたら、とても苦痛なことであります。もし子どもの虐待が‘情緒的な虐待 emotional abuse’をも含むというふうに定義されますならば、虐待という側面がなくもない家庭の数は驚くほど多くなるものといわざるを得ません。セミナーは、観察者の不安感を抱えるといった重大な役割を担います。そこでは生起する事象を包括的に概観し、かつ詳細をよくよく吟味することで心に余裕がもたらされ、そして時間を掛けて十分な熟考を重ねてゆくことがいかに重要かが示されるのでありましょう。その結果として、不安を募らせた観察者が衝動的に未熟な行動に出たりすることを幾分か押しとどめる助けになるものと思われまます。

さて、観察者と家族間で交渉しなくてはならないことが起こります。例えば訪問日程を変えなくてはならないとか、訪問をお休みにするといった場合であります。そうした変化 changes やら中断 discontinuities がためにもたらされるさまざまな反応について考えるいい機会になるでしょう。さらには、将来セラピストになる者にとって、ごく日常的でありふれた、表向きは筋の通った事柄であっても、そこには実にパワフルな無意識的波紋が及んでいなくもない、そうした動かぬ証拠として、それらは深く記憶に刻まれることになりましょう。家庭を訪問するにあたって極力規則的であることが設定される根拠とは、殊更に臨床の状況を真似ているからとも言えません。むしろそれは双方にとっての都合からしてもよく考え抜かれた結果なのであります。家族の生活に外からの訪問者がもたらす影響をよく配慮しますならば、家族が観察者の訪問を事前に承知している必要がありますし、また同時に観察者が極力綿密な観察が可能のための規律 discipline に相応しい何らかの枠組みを持つ必要があるということでもあります。しかしながら、規則的な訪問は、心理臨床のセッティングにおいて生じるのにも似た‘転移・逆転移’に観察者の眼が否応もなしに焦点づけられることになりましょう。そうした事実に

精通するならば、訪問の時間を変更した場合、それらの変化に伴い、たとえ事態が些かこじれたものになったとしても、なるほど一応納得できるのではなからうかと思われまます。

例えば、或る観察者は、当時自らが受けていた分析の時間変更を要望されるという事態にあって、やむを得ず観察の時間をいつもの午後の遅い時間帯から朝の早い時間帯にずらすことを母親に申し入れたのであります。事前に何週間か掛けてお互いの都合を調整し合う時間はまったくありませんでした。実際のところ母親にとってそれが特に不都合ということではなかったのでありまして、むしろその方がいくらか都合がいいということではあったわけですが、大慌てで要求され、表面的には同意したものの、混乱を来たしたようで、その後キャンセルが続いたのであります。そうした混乱のさなかで、観察者は、時には玄関口で待ちぼうけをくらったり、もしくは出てきた母親が寝間着姿で、準備もなしに戸惑ったふうであったりといった事態に出くわしております。観察者は、分析の時間変更をめぐる動揺した気分をそのままそっくり母親と赤ちゃんに感染させてしまったようであります。彼女が変更についてあたふたと要求を申し入れたとき、幾分か彼女自身の認知されていない感情をも投影してしまったということであったものと思われまます。

こうして少なからぬ差し障りが生じたとはいえ、観察者はどうか訪問の規則的なリズムを取り戻したわけですが、後になってこの状況の苦痛なる側面 *painfulness* がどうやらうまく解消されていなかったらしいことが明るみになりました。この家族は新しい住まいに引っ越したのです。事実それほど遠くではありません。しかし母親は新しい自宅に訪問してもらいたくないということを観察者に言明しました。観察対象であった幼い女の子(今や16ヶ月目)は観察者の訪問をととても喜んでおり、また母親自身も観察者に対してそれなりに愛着を覚え、娘の成長について話すことを楽しんでいたにも関わらずなのであります。この家族の引越は夏休みが近づいていた頃に予定されており、恰も母親は、まるで今回は関係性をコントロールし、ショックを与えるのは自分の方だと決めてかかっていたふうでありました。観察者は、観察はまだまだ続くとばかり期待していましたが、これまで培ってきた関係性を失うことがどんなに苦痛であるかに気づかされたのであります。さらに彼女は勿論のこと、観察が継続不可能になったことが最初の頃に自分がしでかしたこととどのような関連性があるかという点を直視し、とくと考えたわけでありまます。心理臨床の状況とも異なり、彼女にしてみれば、母親のうちに起きたところの変化、分離そして喪失をめぐる幼児的な反応について解釈的なコメントをするという可能性はまるであり得ないわけまます。もしそうできれば、いくらか相互に了解しあうこと(ワーキング・アウト)も出来たかも知れませんけれども…。その代わり彼女は、ただ単に、拒絶、恨みそして罪責感をそのまま呑み込むしかなかったのであります。

これほど事が深刻になることはないとしても、観察者は休暇による訪問の中断について慎重に配慮しなくてはなりませんでしょう。事前に何度かそれについて言及しておくことを忘れないこと、そしてそれがもたらす動揺がため、しばしば‘お返し’されることをも念頭に入れておかねばなりません。休暇明けに訪ねてみると、扉にキャンセルのメモが貼られてあったり、もしくは赤ん坊がこちらをもはや覚えてい

なかったり、それで背を向けるやら、怒っているみたいだったり、もしくは母親の機嫌が悪かったり、どこか白けた感じで心ここにあらずといったふうだったりといったことありましょう。‘分離’という傷つきから回復するのに十分な時間を掛けてゆくなかで、実際に赤ちゃんを観察しておりますと、戸惑い、傷つき、怒り、再確認、そして忘却といった、あらゆる感情表現がその顔に浮かびますので、その生々しい心の現実を目の当たりにすることはとてもインパクトのある学びの機会となりましょう。

さて、ここで【乳幼児観察セミナー】で報告された、或る事例をご紹介します。これは観察後に記録された、そのままの観察資料であります。そこでは、母子間の最初の何週間そして何か月という期間に特徴的な原初的不安感 primitive anxieties やら防衛 defense といったものがよく例証されていると考えられます。ここから母子相互の交流について、さらには家族における観察者の位置づけについて語ってまいりましょう。そして最後には、観察者がこうした経験から何を学ぶのかといった問いに再び戻ってみたいと思います。〔※尚、ここに提示されます観察記録は、Liv Darlingのご厚意に依るものでありますことを記して、感謝の意を表します。〕

《観察例:マイケル》 誕生後5週目

・セッティング:

マイケルは、或る労働者階級 working-class の若い夫婦(22-23歳)に産まれた第一子です。彼らは結婚して2年ほど経ちます。住まいは、労働者階級の住むロンドン郊外です。彼らは自分たちの新居を購入しようと決めていて、その夢が実現するまでは母方の実家で両親と同居することにしたわけです。このようにして、妊娠期間の後半とそれからマイケル誕生後の最初の週以降、母方の実家で過ごしておりました。観察者は、この夫婦に出産前にお会いして、週ごとの観察について打診し、快諾を得ております。それから、母子共をマイケルが生まれた産院にお訪ねし、ほんの少しの間ですがお会いしております。そして誕生後10日経ってから自宅に訪問してしばらくお邪魔しております。これからお話しいたしますのは、4回目の観察になります。父親は電気機器サービスの仕事です。母親は地域の大きな病院で事務員として働いておりました。彼らの両親は共に仕事をしておられます。

・観察:

Mrs. C(母親)は、玄関口で私に微笑しながら迎えてくれました。<昨夜はもうてんやわんやだったのよ>と、彼女は言いました。<それで、あの子は今眠ったところなの>。実際マイケルは玄関の扉近くに置かれたベビーバギーの中におりました。こうした彼を見るのは今回初めてです。彼は仰向け寝になり、頭を片方に寄せ、毛布に覆われた足を動かしておりました。Mrs. Cは、私に<どうぞ坐って>と言い、すぐに話し始めました。マイケルはこの日朝方の2時まで起きていて、それからまた5時に目覚めたんだとか。<もう、殺しちゃいそう・・・>と彼女は言います。<夜中ずうっと起きていて、それで日中はずうっと眠っているんだもの・・・>。実際のところ、TVの音が喧しく、会話がろくにできません。それで彼女は立ち上がり、音を少し下げます。<ぜんぶパパのせいなのよ>と彼女は言います。<あの子

が泣き出すと、すぐに抱き上げて揺するの。それにあの子はすっかり慣れちゃったというわけ・・・。彼女は続けて、夜マイケルが起きているときがとても辛いとこぼします。彼女は彼に授乳しながらも、つつらうつらしてしまうのです。彼はどうやら2時間おきぐらいに授乳が必要のようです。<まあ、大体そんなところだね。夜中、6時間ぐらいもつこともあるけど・・・。時間が経つのはすごく速いわ—あの子ったら、30分掛けて授乳するわけ。そしてその後1時間半ぐらいすると、また授乳の時間なんだもの・・・>。勤め先の病院での同僚の誰かさん、ヘルス・ビジターなんだそうだが、赤ちゃんを眠らせるのにいい薬があるわよと言ったんだとか。でも彼女にしてみれば、その考えは感心しないということです。私がお疲れですわねと言うと、彼女はそれに同意し、マイケルに縛り付けられているみたいに感じるということを語ります。<金曜日の晩、友だちの《メイクアップ・パーティ》に誘われて出かけたんだけど。それも2時間ほどですぐにお暇しなくちゃいけなかったのよ>と言います。

この時点で、玄関のベルが鳴りました。・・・それからMr. Cが窓から顔を覗かせているのに気づきました。Mrs. Cは<あら、まあ>とちょっと驚きの声をあげ、彼を中に入れました。彼は室内に入ってきて、私にハローと挨拶し、マイケルの方に目を遣りました。<眠ってるねえ>と彼は言います。Mrs. Cは、シートと彼に静かにするようにと注意します。すると彼は<やれやれ・・・>と言って退散しました。どうやらMrs. Cは、夫がマイケルの眠りを邪魔するんじゃないか、彼が赤ちゃんに対してちゃんとわきまえているかどうか分かったものじゃないといった気分が濃厚でありました。Mr. Cが妻に、住宅ローンに関連する文書にサインをしてくれと差し出します。<ほらね、ここにおまえさんの人生を丸ごと賭けてサインするんだよ>と冗談を言います。Mrs. Cはサインを済ませて、<ねえ、返済ってどのくらいなの>と彼に訊ねます。彼はそれに返答します。それからMrs. Cは、<ねえ、このまま今日は会社には戻らないの？>と聞きます。彼は<いや、すぐに戻らなくちゃ>と言い、グッド・バイと気さくに挨拶して去ってゆきました。

マイケルは、この時点で、ちょっと目覚めたようで、ぐずりだします。そして母親は彼がまだ眠ったままかどうかを確かめます。彼はそのまま穏やかになり、しばらく沈黙が続きます。Mrs. Cはちょっと疲れたふうでした。それからまた気を取り直し、話し出します。Mr. Cと彼の父親とが新しいビジネスを始めたことの詳細を語ってゆきます。・・・Mrs. Cは、それからちょっと憂い顔で、彼女と夫とは、週のうちは晩に彼女がマイケルに付き添って起きていること、それで週末には彼がそうするという互いに同意していたんだという話をします。だけど今やMr. Cはビジネスをスタートさせるのに土曜も日曜も休みなしに働いているので、取り決めが反古にされたというわけなのです。もう一つ他に彼女を苛立たせるのは、新しい家が金曜日に彼らのものになるのだけど、引越はあと2週間も待たなくてはならないということなのです。つまりこの間、Mr. Cは内装に手を加えるんだとか。<彼は今あちこち内装に取り掛かっているはずよ・・・それからカーペットもどこからか手に入れなくちゃ・・・>。それから彼女は、<もし夫が内装をしないということだったら、すぐにでも引越しができたのに・・・>と付け加えます。

こうした考えから気を逸らすかのように彼女は立ち上がり、マイケルを抱き上げます。彼はちょっとぐず

り始めたばかりで、まだ眠たげだったのにも関わらず…。彼女は彼を抱きかかえ、<いつもね、おっぱいの時間になるちょっと前に泣くのよ>と言いました。彼女は坐って、膝にマイケルを置きます。さて、どんな具合かと様子眺めしております。彼は眠そうにまばたきをします。唇と舌を使って吸う動作を始めました。着ていた上着を握りこぶしでこすりながら、口の方に向かってもごもご動かしています。それからその握りこぶしが偶然に、もしくは故意にかもしませんが、口へと持ってゆかれました。顔をしかめて、低い唸り声を発しました。<えっ、今度はどうしたというの？>と、Mrs. Cはちょっと咎めるふうに言いました。<もっと待てないの？この前もそうだったでしょ>と言います。彼女は立ち上がり、マイケルを抱いて肩越しに胸にもたせかけ、TVのチャンネルを切り替えに行きます。<TVの番組を変える間ぐらい待てるわね>と彼に語りかけながら…。

それから、彼女はタオルを取って、マイケルと一緒にソファーに坐り直します。彼の泣き声は彼女が立ち上がった折には既に止んでいたのですが、おっぱいを与えるやすぐさまいかにもひもじそうにおっぱいに食らいつきました。彼は必死に吸っており、まるで貝のように数分ほど吸い付いて離れません。Mrs. Cはしばし沈黙して彼を眺めておりましたが、それから<私たちにはビデオがあるからとてもラッキーなのよ。TVは12時には終了して、それからもう何もないんだもの。ビデオがあるお蔭で、TVを夜中観れるし、日中でも子ども番組を観れるしね…>と語ります。私は、皆が仕事に出かけてしまって(クリスマス休暇の間とは違って)、なんだか全然日常が違ってしまったように思えますわねと言うと、彼女はそれに同意し、<皆が揃って家に居るっていいわね。誰もが皆マイケルを抱きたがるのよ。それで私は入浴する暇も出来るし、自分の部屋に行って、ドアを閉めることだって出来るでしょ>と言います。それからお喋りが続きます。<部屋の中はもうゴチャゴチャと乱雑になっていて、整理しなきゃならないのよ。でも今朝、マイケルをベビーバギーに乗せて、散歩に出かけたの。彼が泣いたからだけど。それでもう全部、汚れたオムツすらも床の上に置きっぱなしにしてというわけだったのよ。時折朝食の後片付けも私がしなくちゃならないってことなの…>。それからちょっと黙って、TVを眺めました。この頃には、子ども番組は古い映画に変えられておりました。その筋書きは、ウィーンでの話し、或る魅惑的な若い女性が、アメリカ人のミュージシャンに求愛され、やがて結婚します。その主人公は<さあ、次に欲しいのは赤ちゃんよ>というわけでした。Mrs. Cはそれには何ら反応せず、ややぼんやりした風にTVの画面を眺めておりました。それから再び彼女は気を取り戻し、マイケルを膝の上につ伏せにして、背中を軽くトントンと叩きます。彼の頭は片側にだらりと寄ったままで、うとうとしております。Mrs. Cは、彼を肩越しに抱き上げます。しゃつくりを始めました。膝の上に戻し、彼女は<おむつ変えるわね。でも、まだおっぱい欲しいかな>と言い、彼におっぱいをやることに決めます。そうすると彼は熱心に吸い始めました。彼女はマイケルが車の中だととてもよく眠るということを語ります。一昨日の晩、夫のビルが、マイケルが寝つきが悪くぐずってた折に、外に連れ出したらどうかと言ったのですが、でも着替えしなくちゃならないし、マイケルをも着替えさせなくちゃいけないわけだから、そんなふうにして寒い外へと出掛けるのは気が進みませんでした。もしも眠ったとしても、また着替えさせるときになれば、目覚めるに決まってるからです。或る日のこと、彼が日中泣き止まないとき、彼女は二階に行って、しばらく彼を一人にさせておいたんだとか。それで彼女が二階から降りてきたとき、彼はまだ泣いていたということでもあります。

彼女は、今度はマイケルのオムツを換えることにしました。彼女はテーブルの上にマットを敷き、その上にマイケルを寝かせました。それから着替えをさせます。<いい子だったら、しばらく足をバンザイして蹴って遊んででもいいわよ>と言います。彼女は彼の下着のレギンスとおむつを脱がせ、綺麗にお尻を拭いてやります。彼は喉をごろごろ鳴らして、深い呼吸をしておりましたが、今やどうにか落ち着いたようです。<この子、こうしてもらうのが好きみたい・・・>と彼女は言います。マイケルはお乳をちょっと口から戻します。それでMrs. Cが彼の顔を拭いてやっていた最中、今度はお尻からねばねばする黄色いものを出します。<あら、まあ！ほらね。まるっきり、上と下とが直通ってことじゃないの>と言い、どこかこのことで彼女は怒ってるふうでしたが、慎重に彼の両足の踵を持ち上げ、マットの上の汚れを拭き取ります。それから彼の上着も汚れたことを知り、それも拭いて脱がせます。その上着を首から脱がせるとき、彼が嫌がるふうに抵抗したので、彼女は<あんたのせいだからね>と彼に言います。

マイケルはどうやらすっきりして、ひとまず穏やかな時間を迎えました。Mrs. Cは彼に向かって優しくあやしかけ、笑ってごらんと促します。マイケルは彼女の顔を熱心に見詰め、頻りに腕やら脚をブラブラ揺すっております。<この子ったら、朝方の4時にしか笑顔を見せないのよ>とMrs. Cは言います。

この時点で観察時間が終了しました。私はこの時間で良かったかどうか訊ねます。<ええ、結構なんだけど。でも、来週は別の時間がいいんだけど・・・>と彼女は言います。避妊リングを挿入することになっていて、前回それで気絶したんだとか。<麻酔をかけてもらわなくちゃ・・・>と、彼女は言います。われわれはそこで別の時間帯を設定しました。Mrs. Cは、マイケルを腕に抱え、私を玄関口まで見送ってくれました。<サヨナラって言うのよ>と彼女は彼に語りかけます。でも彼は反応せず、そこでMrs. Cは笑い、<まるで関心がないんだから・・・>と言います。

・マイケルの観察に関するコメント；

ここにはいづらか抑うつ的で気持ちに余裕のない若い女性がいるといった印象があります。彼女は、父親が赤ちゃんを甘やかすとやら、夫が夜に赤ちゃんの面倒を見てくれず、新居を準備するためにという口実で仕事に明け暮れているとやら、あれこれ文句を言っております。それから赤ん坊についても、なんだかんだとその要求がまじさで彼女をへとへとにさせるとか、あるいは彼は全然待てないのだからと不平を言っております。彼女は彼女自身、赤ちゃんに対して‘満足 satisfaction’という点でまるで競い合っているかのように見受けられます。例えば、彼女がTVを観ること、それに対して彼の授乳。彼女の睡眠、それに対して彼の夜の目覚めの時間といったふうに・・・彼女自身の母親が彼女の会話にはまるで登場しておりません。それもちょっと奇異な感じがいたします。彼女は、自らの赤子を世話するのに彼女を支えてくれる、愛する母親といった‘内的イメージ internal image’との繋がりを見失っているふうで、まるで‘世話されず放っておかれている小さな女の子’といった印象であります。

TVに彼女が頼りがちなのは、それでいづらか生きてる感覚で自らを充たし、そして脆さとか空虚さといった感情を寄せ付けないためだったり、或いは赤ちゃんに対する‘殺人的な’憎悪で満たされること

の不安感を鎮めるためだったり、そうした心の抗いであろうかとも見受けられます。彼女は、自らの敵意ある感情を意識しており、観察者にそうしたプレッシャーの感覚をととも率直に分かち合おうとしております。誕生した赤ちゃんがすなわち彼女にとって、‘注目 attention’をめぐってのライヴァルだというのが殊に驚きです。お気に入りの娘であること、たぶん一人前のおとなというよりもむしろどこかまだ子どもと見做されていた彼女がいるのでしょう。それが今や両親の情愛は赤ちゃん、つまり心酔される孫へと移ってしまったのであります。おそらくそれと同じ理由で、彼女は夫が赤ちゃんに関心を寄せることにもやや神経過敏になりがちのようです。最初の子どもの誕生を機に実家に戻ったということは、母親が、かつて弟妹が誕生した際に生じた、家族内での安定した位置を失ったという、かつて味わった苦痛に繋がるサインかとも思われます。〔この観察時には、彼女に弟妹がいたのかは承知しておりませんでした、そのことは後に確認されております。〕

これらのやや混乱した感情の軋轢下にあつて、彼女はマイケルを抱き上げます。恰も彼女自身を慰めるかのように…。赤ちゃんに身を委ね、そうして母親としてのより良い感情を蘇らせるためにであります。この時点では、マイケルのニーズに反応するというよりもむしろ彼女自身のニーズに気持ちが押されざみだったといえるかと思われれます。後に、マイケルの汚れたオムツを取り換えているとき、その彼が排泄物で衣服を汚したことに彼女はひどく悩まされます。お蔭で彼に着替えさせなくてはならず、それを彼が嫌がって不快感を露わにしたこともあり、彼女がしなくてはならない余計な仕事ができなせいで、俄然彼を咎める気分になったというわけです。

マイケルはその一方で、彼自らの感情に没頭しているように見受けられます。彼はとても力強くオッパイを吸いますし、彼が授乳されたがっていることを母親に効果的に伝えんとしております。彼の目覚めている数分の間、すべてが彼の口に気持ちが集中されております。彼の焦点づけは明らかに彼の口唇に位置づけられております。彼が握りこぶしを口へ持っていったとき、想像上の、たぶん夢のような口の満足感、それに実際のお乳、そして口元に掴んで離さない乳首といった、それぞれの違いが徐々に彼には理解され始めたかのようであります。抱っこされ、お乳を飲ませられる体験は、彼を一つにし、彼に一貫性やら集中力を与え、そして赤ん坊がお乳を、そしてそれとの繋がりをも希求するといった統合的な反応 integrative response を彼に与えているように見受けられます。観察者は、マイケルの眠そう、いかにもバタついて落ち着きのない手足の動きと、彼の授乳にしっかり熱中する、その落ち着きぶりとを対照づけて書きとめております。彼がオッパイに夢中になっているのを眺めながら、母親はTVがどんなに自分にとって必要かという話をしてありますが、それは恰もマイケルが彼女に抱きかかえられ授乳されることで焦点付け focus を得られたのを無意識裏に意識させられ、彼女は他の何かに気を向けることで己れの気持ちを取り戻し、そしてそうすることで、もしかすると自分の内なる混乱と崩壊といった感情に打ちのめされることから身を庇ったといえなくもありません。そうすることで彼女自身の不安感でいっぱい、混乱しかつ不確かな部分もどうか落ち着き、穏やかになれたといえるかも知れません。実際のところでは、部屋中が混乱していて、ゴジャゴジャで実に酷い状態だと彼女は嘆いてみせているわけですが…。

観察者は、マイケルに対して母親が容易に彼のニーズや感情に対して受容的になれないことに、また母親に対しても、混乱を来した原初的な感情に葛藤し、内なるもしくは外なるサポートの絆から切り離されているらしいことに、同情を寄せております。ここで観察者の訪問は、この母親にとっては孤独感や隔絶感が薄らいだようで、いくらか慰めであったと付け加えてもよろしいでしょう。観察者自身、母親の注目を希求せんとするニーズに直面し、或る種のプレッシャーを覚え、そのせいでマイケルの行動の詳細についての観察の方は思うほどには出来なかったということがあったようです。

・討議；

この観察事例は、普通によく語られる、出産後の母親の身に起こりがちな抑うつ的なムードを例証しているものと思われます。そこには母親の心の内に甦った幼児的要因が窺われますし、またそれは母子間に共有されるいくらか原初的な不安感の高じるせいで起きたとも考えられます。母親は、幼い赤子の世話で昼夜の区別がなくなり、混乱を来し、また部屋中のあちこちに汚れものが溢れていたり、何もかもが抱えきれなくなり、それに赤ん坊がいちいち要求がましく、それがために元通りの生活に戻ることもままならず、まるで授乳マシーンになったかのように思われたりもして、どうにも心が脅かされたふうに見受けられます。彼女の、マイケルや夫や父親に対して懐くところの怒りや敵意は、彼女の気を辛うじて引き締め、ぐちゃぐちゃになりかねない気分を何とか支えていたかのようであります。マイケルの身体的な一体感 *bodily integrity* にまつわる不安感、服を脱がせられたりオムツを取り替えられたりすることへの反応として嫌がって頻りにむずかる様子に覗かれるものの、それも授乳されることで彼が一体感を取り戻しているのは明瞭と考えていいでしょう。彼がこうした心の強靭さ *resilience* を示し、母親もそれを彼の力溢れるサインとして見做し、それに対してハッピーに反応しているといった一連の出来事からして、これは或る意味、彼らがこれから共に成長してゆく上で何らかの特徴的といえなくもない、些細なことながらも、そうした一つの兆候がここに垣間見られるように思われます。

観察者は、セミナーに戻ってきたとき、この観察の経験によって些か打ちのめされているふうでした。というのは、母親の怒り、それにその迫害的な赴き、殊にマイケルに向けられたそれらが彼女にはどうにも耐え難いものを感じられたからなのです。と同時に、母親の彼女に対してのあけっぴろげな無防備さにも心底驚いたのです。例えば、赤ん坊の飽くことを知らない食欲についての母親の感情は‘人食いの’と言わんばかりの冗談で吐露されたり、地下室の御棺についての話題にも特徴づけられる家庭全体へ向けられたあけっぴろげな敵意であります。しかし実際のところ、観察者にとって見るに忍びないと思われたことは、マイケルの傷つきやすさが時としてもあそばれたり、もしくはまったく無視されたり、それから母親が感情をいたく損ねて平静さを失ったりする様を見ることであります。彼女は、その逆の方向に何が何でも事態を戻したいと思ったのです。つまり、どちらにも援助の手を差し伸べ慰めてやりたかったのです。母親の方にはケアと注目をめぐっての無意識的競争心があり、それが躓きの石となって家族の誰もが彼女に援助的な手を差し伸べることを難しくしているのは一目瞭然です。1時間の観察で、彼女はすっかりたびれ果ててしまいました。それはまるで母親のくたびれ果てた状態の皺寄せを食らったかのようで、あれやこれやの矛盾した感情が押し寄せてきたというわけです。そして、折々に

マイケルに垣間見受けられた生の衝動の逞しさにも大いに刺戟されたということでありましょう。

これら原初的な心の状態を目の当たりにすることのインパクトは、勿論のこと、観察者にとって大いに心乱すものであり、辛い思いをしたのは確かと思われる。セミナーでいろいろと話し合われ、そうした観察者のてんやわんやの情動が抱えられたわけですが、その一方で観察記録を書き上げて纏めるといった規律 discipline に従うことで観察者の‘大人の部分’の能力がどうか機能し得たとも考えられましょう。このように観察者は手酷く心を動揺させるということがありますから、そうした場合ごく自然に【パーソナル・アナリシス personal analysis】を受けたい、そしてそこで何らかの援助を得なくてはといった内的な衝迫を覚えることにもなりましょう。そしてこのことは、実に心理臨床の仕事に携わるためには必要不可欠な前兆と申せましょう。

・結論:

観察という経験は、研修生にとって心理臨床の実践に向かうべく心の体勢を育む上で大いに助けになるということを語ってまいりましたが、ここで簡単に幾つかの点をまとめて結論といたしましょう。観察には、まず大いにセッティングに注意が払わねばならないということがあります。訪問の曜日・時刻はいつも同じであること、訪問は規則的であることです。訪問のリズムを変えることは混乱を惹き起こすということに留意すること(休暇 holiday breaks も含めて)が肝要です。それから、無批判的に注目している観察の雰囲気からごく自然に生じる‘転移’的要素と‘逆転移’的特徴との間には違いがあり、それぞれ別に考えていいでしょう。後者の場合ですと、観察者の個人的な無意識的反応(古典的な意味での‘逆転移’という概念になりますが)の侵入を含むものでありますが、これにはまた同時に、観察者の情動的状態のそれらの要素をより深く探ってゆけば実に家族成員からの投影を感知したがゆえに発生されたと思われる場合もありますので、それらも含まれると考えていいでしょう。(これは、今ここで述べているところの‘逆転移’の意味です)。

ここに関与されますところの感情はしばしばとても強烈であり、それはおそらく前言語的 pre-verbal なコミュニケーションに基づくものと思われるので、こうした場合、転移および逆転移というものを考えることは基本的に重要であり、それは子どもについて学ぶ上で、その他の重要不可欠な側面にも繋がってまいりましょう。すなわち、子どものコミュニケーションの様式 mode についての感受性が育まれることになるわけです。受講生はやがて正常な‘投影同一視’というものを感得するに至りますし、子どもの‘身体的な言語 body language’について幾らか理解することにもなりましょう。そしてもしも‘幼児性転移 infantile transference’に真摯に取り組もうとするならば、セラピイ患者との作業において‘前言語的経験 pre-linguistic experiences’をよく描写し得る言語を獲得することが必須でありますので、そうした試みに挑戦して学んでゆくほかありません。これらの特徴は、沈黙しがちな患者を相手に一緒にセラピイに臨む場合には殊更助けになるものと思われる。そうした場合、ごく些細な身体的な動作だけがそこで何が起きているのかについて理解の決め手となる、そうした主たる源 source であるかも知れません。もっとごく幼い子どもとのセラピイにおいてですと、それはもっと明らかでありましょう。

しかしながら、ここで何よりも貴重なレッスンとは、‘精神分析的な態度 psychoanalytic attitude’の育成に関係づけられると言わねばなりません。それは「仮説を設ける」といった科学的構成要素を含む必要があり、それは更なる観察によって幾度も検証されてゆくわけであります。2年間の乳幼児観察は、こうした点において実に称賛に値すべき導入 introduction になるかと思われまします。それから、もっとも重要な事柄として挙げられるのは、情緒性 emotionality への感覚 sensitivity が募ってゆくということであります。それはすなわち、感情が心の内省的部分 a reflective part of mind によって認知されることからたらされるものなのです。ビオンが、子どもの原初的な情緒的コミュニケーションに関連して‘夢想 reverie’といった母親の心の状態を語っておりますが、良き観察者に、そして良き心理臨床家になるためには、同じような資質が求められまします。そのためにはすなわち心の内に‘スペース’があることが必須の条件となります。そこにおいてこそ思考 thoughts は形を成し始めるわけですが、更には混乱した経験が、不完全なフォルムなまま、その意味がよりいっそう明らかになる迄はしっかりと抱えられることになるのです。こうした精神的機能には、不安感、不確実性、不快感、無力感、また懊悩といった心性に耐えるべく何らかの能力が必要とされまします。それは、精神分析的サイコセラピスト個々人にぜひとも備わっていないとてはならないもの personal equipment と考えられております。

Tavistock Clinic

120 Belsize Lane London, NW3

・謝辞:

この論文に書き綴られた内容のあらまは、私がかつて **Marth Harris** の【乳幼児観察セミナー】に受講生の一人として参加しましたり、またそれ以後も臨床症例についてスーパーヴィジョンを受けました折々に彼女から学ばせてもらった事柄に本来その多くを負っております。そして今や嬉しいことに、彼女の論文集が編纂され出版されておまして、その中には幾つか《乳幼児観察》についての論文も含まれております。それらから更なる導きを得たということもございます。

・参考文献:

Bick, E. (1964) Notes on Infant Observation in Psycho-analytic Training. Int. J. Psycho-Anal. , Vol. 45.

Bion, W. R. (1962) Learning from Experience. London :Heinemann.

《原典》: 《 Encountering Primitive Anxieties: Some Aspects of Infant Observation as a Preparation for Clinical Work with Children and Families 》
by Margaret Rustin

【The The Journal of Child Psychotherapy】(1988), Vol. 14 (2)
